

令和三年度 学力検査問題

国語

（九時二十五分～十時十五分）
（五十時間）

受検番号	第	番
------	---	---

注 意

1 解答用紙について

- (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
- (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄^{かど}二か所に受検番号を書きなさい。
- (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
- (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
- (5) 解答用紙の＊印は集計のためのもので、解答には関係ありません。

2 問題用紙について

- (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
 - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十三ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(26点)

東京の美術大学に通う離島出身の望音は、森本研究室(森本ゼミ)に所属し、卒業制作に取り組んでいる。夏休み明けに、同じゼミの太郎が、大学を辞めるつもりだとゼミの仲間打ち明けたところ、望音は、「十分頑張った、とか言うな!」と言って部屋を出て行った。

望音は食堂の前のベンチに一人で座っていた。太郎は黙って近づき、自販機で買った紙バックのジュースを差し出す。

「……すみません、偉そうなこと言って。」と望音は小さく頭を下げた。

「いいよ。」

「ほんとに、辞めるんですか。」

「うん。」

望音は遠慮がちに、作業着を握りしめながら言う。

「うちはもつと太郎さんと一緒に頑張ってたかった。同じアトリエで、最後まで絵を描いてたかった。卒業制作も、太郎さんにいろいろ見てほしかった。なのに……ほんまに諦めてしもうて、後悔せんの?」

テラス席に座っている学生のグループが、ちらちらと見てくる。

「俺さ、この一ヶ月ずっと自分を見つめ直してたんだ。それで気づいたんだけど、あの壁にグラフィティをかけたとき、久しぶりに内面から湧いてくる感動みたいなものを体験できたんだよ。ああ、俺って、みんなでここで青春を過ごしたんだって。たぶん俺には、周囲と競争して一握りのプロの席を奪い合うよりも、俺らしく、誰かと協力して好きなことをする方が大事なんだ。でもそれって残念ながら、森本先生が目指している答えとは違うし、いわゆる「アーティスト」として食べていく才能もないんだと思う。けじめをつけるためにも退学しようって、自分で決めたんだ。」

しばらく黙って話を聞いていた望音は、「これからどうするんじや。」と訊ねた。

「まだ決まっていないけど、昔の仲間が訪ねて来てくれてさ。知らなかったんだけど、そいつは別の美大に入って、アートの文脈でグラフィティを実践しようとしているみたいで、もしよかったらまた一緒にやらないかって誘われた。またやるかは分からないけど、今までやってきたことは無駄じゃない気がする。」

「……そっか、うまくいくとええなあ。」

①望音はやつと太郎を見て、ほほ笑んだ。

「ありがとう。でもさ、望音も俺と同じで、他人の評価には縛られたくないタイプだと思ってたんだけど、どうしてそんなに頑張れるの? 卒業したあと、大学院で森本研究室に残るわけじゃないんだろ。」

つきにいつ望音と話せるか分からないので、太郎は聞いておきたかった。

望音は迷うように、手に持っていた紙バックのジュースに視線を落とした。

「じつはうち、ロイヤル・アカデミーの先生から、大学院に誘われとるんじや。」

「ロイヤル・アカデミーって、イギリスの?」

前期がはじまった頃、アトリエにロイアカの大学院生が見学に来ていたという話を太郎は思い出す。

望音は肯く。

「でも正直、まだ迷ってる。家族にもまだ言ってなくて——。」

三月上旬、[※]Y P Pの審査員をつとめたロイヤル・アカデミーの教授から、望音は一通のメールを受け取った。望音は誘われるままに、春休みとY P Pの賞金を利用して、ロンドンを訪れた。

王立芸術院、英名でロイヤル・アカデミー・オブ・アーツは古めかしくて歴史を感じさせる外観でありながら、開放的で明るい雰囲気だった。美術館には豊富なコレクションの一部が無料で公開され、毎年名だたる現代アーティストも参加する「夏季展覧会」は、ロンドンの夏の風物詩として有名ならしい。

さらに美術館の奥には、個性的な服装の若者たちが制作している建物があった。

印象に残ったのは、付属の小さなスペースで展示されていた学生たちの作品である。どれも素晴らしい絵ばかりで、望音は圧倒された。絵だけではなく立体やインスタレーションなど、ジャンルに囚われずに自由な発想で展開されていた。

教授から大学院生を紹介され、アカデミー内を案内してもらいながら、彼らがしっかりと自作を説明し、確固たるビジョンを持って制作をしていることに驚かされた。

——で、あなたはここで、どんな絵を描きたいの？

そう訊ねられ、^②望音はろくに答えられなかった。

その理由は、英語だったからだけではない。

望音はロンドンの喧騒^{けんそう}を行き先も決めずに彷徨^{さまよ}った。明るい未来がこの街に広がっているはずなのに、頭のなかを不安が塗りつぶす。離島出身で美術のことも日本のことにも知らなくて、東京でだって精一杯なのに、さまざまな人種や言語の行き交う、当たり前前に自己主張を求められる大都会で、本当に自分はやっていけるのか。

とりあえず語学が留学の必要条件だったので、帰国後は参考書やオンライン英会話で勉強したけれど、根本的な迷いは消えなかった。覚悟がいまだに決まらないまま、また誰にも打ち明けられないまま、ここまで来てしまっていた。

最初に描いた島の絵が却下されたのも、今ふり返れば、その誘いによる迷いや焦^{あせ}りが邪魔をしたからだ。

「この美大にきたのも、本当はうちの意志じゃなかったんよ。うちはただ、絵が描ければそれでいいという気持ちがあつて。それは島にいても、東京にいても、どこにいても同じじゃ。だったら、わざわざ海外に行く必要なんてない気もして——」。

「なに言ってるの？」

いきなり太郎に一喝されて、望音は顔を上げた。

「ロイアカだよ？ マジですごいじゃん！ 俺、望音が海外に行つて勉強したあと、どんな絵を描くのか、めちゃくちゃ見てみたいよ。」

「見てみたい？」

^③望音は目をぱちぱちさせながら太郎を見る。

「そう、たぶん俺だけじゃないよ。ゼミのみんなだって、荒川さんとか他科のみんなも、今の話を聞いたら、望音の絵がどんな風になるか知りたいって答えると思うよ。望音だって見てみたいと思わないの？ 海外に身を置くことで『自分の絵』がどんな風に変わっていくのか。」

そう言われて、はじめて望音は思い出す。

絵は自分にとって「見たい世界」を描くものだった。

でもいつのまにか、熟知した世界ばかり描くようになっていた。描くことは冒険であり旅のはずなのに、安心するために、自分を守るために、自分の殻^{かち}に籠城^{ろうじょう}してただただ描きやすいものばかり選んでいた。

この美大に来てから、とくに森本ゼミに入ってから、少しずつ島にいた頃の自分には描けなかったものも描けるようになったのに、あの卒業制作のプランは、それ以前の自分の自己模倣^{もほう}でしかなかった。

もう島から出て行かなくちゃ。

もっと広くて未知の世界に足を踏み入れなくちゃ。

望音さ、と太郎は天を仰いだ。

「へこんでる場合じゃないよ。目の前に広がってる可能性に比べたら、どれもちっぽけなことじゃん。望音が本当にいいと思う絵を描いていれば、望音が望音じゃなくなるわけないよ。だって望音には、才能があるもん。」

太郎は自分の言葉に納得したようにつぶける。

「うん、才能だよ。運や努力も関係するんだろうけど、生まれつき途方もない才能があるやつって、世の中にはごく稀^{まれ}にいると思うんだ。そういうやつは放っておいても、回り道しても、いつか絶対に花ひらく。まわりには想像もつかなかったような、大輪の花を咲かせるんだよ。」

才能という、実体のない言葉が望音にはずっと苦手だった。

母をはじめ周囲の口から出るたび、ぴんと来なくて信じられなかった。

自分に才能があるのかどうかは分からない。でもこうして誰かに才能があると信じてもらうことが、こんなにも勇氣になるのだと望音ははじめて知った。太郎の言葉が、強力なおまじないのように望音に勇氣を与える。その勇氣が指先に伝わり、絵を描きたいという気持ちが広がっていく。

「俺さ、望音が咲かせるその花を、いつか見られるのを今から楽しみにしてるんだ。だってその花は本人への贈り物^{わく}なだけじゃなくて、結果的にはまわりへの贈り物でもあって、他の大勢の人の心に必ず残るものだから。」

太郎は絵画棟^{えいぶどう}を見上げながら言った。

④「太郎さん、ありがと。」

太郎と別れたあとアトリエに戻りながら、望音は不思議と痛みと耳鳴りが消えたような気がした。

(一色さゆり著『ピカソになれない私たち』による。一部省略がある。)

(注) ※アトリエ……画家・彫刻家などの仕事部屋。工房^{こうぼう}。

※グラフィティ……落書きアート。いたずら書きに似たペイントアートのこと。

※YPP……ここでは若手の画家を対象とした賞「ヤング・ペインター・プライズ」の略。

※インスタレーション……さまざまな物体を配置し、その空間全体を作品とする手法。

問1 望音はやつと太郎を見て、ほほ笑んだ。とありますが、このときの望音の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 一緒に卒業しようと約束したはずの太郎が退学することが、急な話で受け入れられないばかりか、かける言葉も思い浮かばないので苦笑いをしている。

イ 卒業制作を太郎と一緒に頑張ることはできないが、同じ芸術を志す仲間として、太郎が自分なりにやりたいことを探していることを聞いて少し安心している。

ウ 太郎が昔の仲間と意気投合して、自分だけの表現を追い求めて他の美大に行くことが決まっていることに尊敬の念とうらやましさを感じている。

エ 太郎とは卒業制作を続けられないものの、自分のことを気にかけてくれていてアーティストへの道を譲ってくれたやさしさをありがたく感じている。

問2 望音はろくに答えられなかった。とありますが、望音が答えられなかった理由を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 英語がうまくできないというだけでなく、ロンドンの学生たちの個性的で自由な発想の作品に圧倒され、誰と創作していくか決めかねていたから。

イ 急に苦手な英語で問われたことで答えにつまり、絵画のことよりもロンドンの生活様式に馴染むことができるか、少しだけ迷いを感じたから。

ウ 英語でのやりとりということもあるが、自己主張を求められるロンドンのような大都会で本当に自分はやっていけるのかと、覚悟が決まらなかったから。

エ 英語での会話の内容はともかく、自分は言葉によらず作品だけで勝負しており、良い作品を作るのに場所は関係ないと感じているから。

問3 望音は目をぱちぱちさせながら太郎を見る。とありますが、このときの望音の様子を説明した次の文の、空欄Ⅰ、Ⅱにあてはまる言葉を五字で、空欄Ⅲにはあてはまる言葉を九字で、本文中からそれぞれ書き抜きなさい。(6点)

わざわざ	Ⅰ	必要がない、絵が描ければそれでいいという気持ちがあると太郎に告げたが、ロイアカで勉強したあとの自分が	Ⅱ	を見てみたいという、思いもよらない言葉を太郎にかけられて驚いている。
------	---	--	---	------------------------------------

問4 太郎さん、ありがとう。とありますが、このとき望音が太郎に感謝をしている理由を、次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、卒業制作、未知の二つの言葉を使って、四十文字以上、五十文字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

太郎が、自分の才能を信じてくれて勇気が出たということだけでなく

[illegible]

問5 本文の表現について述べた文として適切でないものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア「諦めてしもうて」これからどうするんじゃ。」のように、太郎の言葉には方言独特の言い回しが含まれており、離島出身の太郎の人物像を印象づけている。

イ「つぎにいつ望音と話せるか分からないので、太郎は聞いておきたかった。」のように登場人物の心の中が会話文以外にも表現されている。

望音と太郎の会話の途中に、望音が過去の出来事を回想する場面を入れることで、望音の心情をよりくわしく読者に伝えている。

工「描くことは冒険であり旅」想像もつかなかったような、大輪の花を咲かせるんだよ。」のように、擬人法（ぎにんぽう）を用いることで、望音の様子を読者に印象づけている。

オ「望音は遠慮がちに、作業着を握りしめながら言う。『望音は肯く。^{うけ}』のように、会話文と会話文の間に文を入れることで、会話中の登場人物の様子を伝えている。

2 次の各問いに答えなさい。(24点)

問1 次の1部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 農家の庭先で脱穀をしている。
- (2) 迅速な行動をこころがける。
- (3) 美術館で展覧会を催す。
- (4) 市内をジュウダンする地下鉄。
- (5) 彼にとって、その問題を解決することはやさしい。

問2 次の――部の動詞と活用の種類が同じものを、あとのア～エの文の――部から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

方位磁針が北の方角を指している。

- ア 詳細は一つ一つ確認をしてから記入する。
 イ 好きな小説の文体をまねて文章を書いた。
 ウ 思いのほか大きな声で笑ってしまった。
 エ 普段からの努力を信じて本番に臨む。

問3 次の――部「だ」と同じ意味(用法)であるものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

彼女の趣味は読書だ。ある日、休みに話しかけると、彼女は顔を上げ、本にそっとしおりを挟んだ。和紙で作られた少し大きめのしおりだ。教室に入は少なく、いつもより静かだ。私が、好きな本について話そうと言うと、彼女の表情は少しやわらいだ。

問4 次は、中学生のAさんたちが、グループで調べた内容を発表する学習で用いた「発表メモ」と「フリップ」、その発表の準備のための話し合いの様子です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【発表メモ】

ア	はじめ(1分) 調べ始めたきっかけ ・プラスチックごみについての新聞記事 ・私たちの身の回りにあるプラスチック
	なか①(1分) 調べてわかったこと ・プラスチックごみの種類と量 ・多くをしめる「プラスチック製容器包装」 ・ポイ捨てされたプラスチックごみのゆくえ
イ	なか②(1分) 地域の清掃活動に参加して ・実際に河川にあったプラスチックごみの種類 ・市役所の方にかがった話
ウ	おわり(2分) これから私たちにできること ・「プラスチック製容器包装」などのごみを正しく捨てる ・ポスターなどによる地域への呼びかけ
エ	

【フリップ】



話し合いの様子

Aさん「『発表メモ』と『フリップ』を見てください。発表の中で『フリップ』を提示するのは、どの場面がよいと思いますか。」

Bさん「私は、『発表メモ』でいうと『はじめ』の場面がよいと思います。発表を聞く人たちがプラスチックごみについて具体的にイメージをしやすと思うからです。」

Cさん「私は、発表の中の言葉に注目しました。『プラスチック製容器包装』という言葉が、『発表メモ』の『おわり』のところにあるので、まとめとしてそこで提示するのがよいと思います。」

Bさん「なるほど。『フリップ』に示した言葉が、発表の中で使われたときに提示するのは効果的ですね。それならば、『発表メモ』の『なか①』で『プラスチック製容器包装』という言葉が初めて出てくるので、そこで『フリップ』を提示しながら説明をしてはどうでしょうか。」

Cさん「それはいい考えですね。伝えたい内容をわかりやすく提示することができるので賛成です。」

Aさん「それでは、『フリップ』を提示するタイミングは、そのようにしましょう。」

話し合いが続く

- (1) Aさんたちのグループは、『フリップ』を発表のどの場面で提示することにしましたか。
- 話し合いの様子 をふまえて、『発表メモ』のAーEの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- (2) 伝えたい内容をわかりやすく提示する とありますが、スピーチやプレゼンテーションなどにおいて、フリップを作成して用いるときに気をつけることとして適切でないものを、次のAーEの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

A 写真やデータを引用する場合には、それらの出典をフリップに記して明示する。

I フリップの一部を付箋で隠してあとから見せるなど、相手の興味を引く工夫をする。

U 会場の広さなどに応じて、フリップの文字や図表を適切な大きさに調整する。

E 発表の台本に記した言葉は、すべてフリップにも記して相手に見えるようにする。

- (3) Aさんは次のような文を書き、それを推敲しました。推敲後の文中の〓部と――部の関係が適切になるように、空欄にあてはまる言葉を、ひらがな四字で書きなさい。(2点)

(はじめの文)

私が目標とするのは、聞く人に正しく伝わるように発表したいです。

(推敲後の文)

私が目標とするのは、聞く人に正しく伝わるように発表

〓
――
〓
――
〓

です。

乗り物のうちで、歩くことに最も近いのは、著者の経験ではカナディアン・カヌーに思われる。もちろん、[※]ホワイトウォーターに挑むスポーツとしてのカヤッキングではない。河と湖をカナディアン・カヌーで進み、森のなかではそれを担いで踏破する移動だ。^①カヌーは深い思索に誘われる。哲学するためにこの乗り物を作ったのではないかと思えるほどだ。しかしそれは歩いているときやトレッキングしているときとは、思考の働き方がかなり異なる。カヌーを漕いでいるときの方が、より深く、より多角的に、その場所に包まれる。自分は環境の一部分となり、その一部分全体が移動する。自分は水となり、その水が海に向かう。歩いているときには、自分の身体は環境に包まれつつも、それから身を引き剥がし、足を宙に浮かしている。カヌーでの思考は、歩行のときよりも形而上学的になる。[※]

ヨットと乗馬は、圧倒的に素晴らしい経験であるが、歩くこととは似ていない。乗馬には、馬という相棒がいる。相棒と自然について対話しながら進んでいく。だが、この相棒と私とは志向性がかなり異なり、ときに初心者には難解な言葉を容赦なく浴びせてくる。馬の歩行のリズムは、人間の歩行のリズムと異なるが、非常に快適であり、快楽をもたらす。[※]ケンタウロスは、ひとつの人間の身体的理想なのかもしれない。

ヨットは、散歩よりもはるかに危険な行為であり、個体の生命をつねに自覚させられる。[※]セイリングでは、カヌーと同じく、自然に完全に包まれ、風と波、海の一部と化す。しかしカヌーが身体との一体感が強いのに比較すると、ボートは依然として乗り物であり、クルーもいる。風と波に従いながら、それらを最善に利用するには、知恵とチームワークが必要である。セイリングでは、多忙な労働と瞑想が交互にやってくる。それは風と波のリズムの反映である。

こうして、カヌーやヨット、乗馬では、^②自然のもつ意味が、それぞれに散歩やトレッキングとは大きく異なっている。

歩くことは独特の経験である。しかし足もある意味で乗り物である。乗り物はさまざまな用途に使える。ここで私が論じているのは、散歩としての、トレッキングとしての歩きである。それは歩くこと自体に注意を向け、歩くことで展開する風景に侵入される経験である。リズムカルに、しかし道の細かい変化を足の裏で拾い上げながら、ほんの少しスピードを変えて、周りの空気を静かに吸って吐き、自分が押しのける風のなかで自分の体を感じるのである。歩くことそのものが、生きることであったのではないか。

しかし、^③散歩やトレッキングは、ただ足を前後することではない。自宅の小さな庭をぐるぐる回るのは楽しめない。外に出て、いつもの道と寄り道を取り混ぜながら、あるいは旅行先の見知らぬ場所を歩くことは、大げさに言えば、自分を異なった存在にすることである。散歩もトレッキングも、自分の歩みと連動する風景、息と大気の循環、束縛がなく自由に動かせる空間と身体、あらゆるものをしっかりと観察できるゆったりとしたスピード、少しずつであるが蓄積される疲労と休憩の場所、こうした身体と環境との即応を感じ取るものである。もつとも重要なことは何か特定の目的がないことである。しかし、私たちは歩くことで何かとの出会いを求めている。しかしそれが何かは分かっている。いつ出会えるかも分からない。そのような特別のものに出会える場所を見つけようとしているのだ。いや、見つけるというのは適切な言葉ではない。そうした人間の能動的な選択によって現れるのではなく、その何かが、その場所で待っていてくれるという表現を使ったほうがいい。

哲学と散歩の結びつきはかなり本質的である。多くの哲学者たちが散歩を好み、散歩しながら思索し、友人と議論をした。アリストテレスは歩きながら議論し、その弟子たちは逍遙学派と呼ばれたことは知られている。東洋思想でも、散歩と思索はひとつのものであった。近代になっても、散歩者を数えればキリがない。

なぜ、哲学と散歩はここまで強い結びつきがあるのだろうか。人類学的な説明をすれば、二足歩行により、手が自由になり、口に鋭い歯と重い顎が必要なくなった。話して考える準備は、足がもたらしてくれたのだ。しかしより本質的に言えば、歩くことと考えることが同じ行為だからではないだろうか。

散歩は目的地をもっているわけではない。かりに目的地がある散歩であっても、そこに到達する過程の方に意味がある。散歩は、何であるか分からないものとの出会いを求めて歩く。自分が求めているものが何かわからず、何に出会いかも分からないが、出会ったときにはそれを必然と感じるような何かを探して歩いている。そのさがしものは、記号化され、誰からも分かるような道端に置かれていてのではない。微かな微だけを頼りに、草深いトレイルを歩いて見出すのだ。さがしものを手に入れることに目的があるのではない。さがしものが自分を変化させることが大切である。それは自分にしか見つけられない場所を訪れることである。

散歩において見つけた、しばし留まるべき場所、これまでの自分とは異なった視野を与えてくれる丘の頂上、緑の生き物の内臓のような森、不健康なほどコバルト色の空が宇宙に届いている高原、風の足跡を残してうねる砂丘、永遠にクロールしたくなるようなサンゴ礁の海辺。これらの場所に到達して私は変身する。そこに永らく座っていたくなるだろう。しかし自分が散歩の途中であったことを思い出し、私たちは再び歩き出す。どこでもない目的地を探して。

⑤ こうした散歩の歩き方は、考えることに非常に似ていることにお気づきだろう。思考には、問題解決のためのありとあらゆる行動が含まれている。それは、問いに始まり、どこにたどり着くかおぼつかない旅である。知的な探求は、踏みならされた道路を進むことではありえない。

歩くこと、話すこと、考えることには、共通の構造がある。それは、ドロワによれば、「崩壊しはじめ」、「持ち直し」、「また始める」という構造である。たしかに、ある方向に移動するという推進と、それを実現するための足と地面との調整の連続で歩行はできている。細かな失敗と修正を繰り返して、私たちは歩むのだし、考えることも話すことも同じような過程で進んでいく。この点にはまったく同意できる。ドロワは、さまざまな哲学者の歩行＝思考の仕方を分析し、それぞれの哲学者の思想の違いは、その歩き方の違いに対応しているという興味深い説を展開している。

(河野哲也著『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』による。
一部省略がある。)

(注) ※ホワイトウォーター……川の激流。

※トレッキング……山歩き。

※形而上学……物事の根本原理を研究する学問。

※ケンタウロス……ギリシャ神話で上半身は人体、下半身は馬の形の怪物。

※セイリング……水上を帆走すること。

※逍遙……あちこちをぶらぶら歩くこと。

※トレイル……踏み分けた跡。

※ドロワ……ロジェ・ド・ドロワ。フランスの哲学者。(一九四九)

問4 さがしものが自分を変化させる ④とありますが、筆者の考えるさがしものと同じ内容を表している部分を、本文中の同じ段落(形式段落)から二十二字で探し、最初の五字を書き抜きなさい。(5点)

問5 こうした散歩の歩き方は、考えることに非常に似ているとありますが、筆者の述べる散歩の歩き方は、どのような点で考えることに似ているのですか。次の空欄にあてはまる内容を、道路、失敗の二つの言葉を使って、四十字以上、五十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

散歩の歩き方は、どこにたどり着くかおほつかないが、

という点で、考えることに似ている。

50

40

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

鎌倉 中書王にて、御鞆ありけるに、雨降りて後、いまだ庭の乾かざりければ、

いかがせんと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積み、多く奉りたりければ、
どうしたらよからうかと相談があった
おがくす
たくさん差し上げた

① 一庭に敷かれて、泥土のわづらひなかりけり。「とりためけん用意ありがたし。」と、
集めた

② 人感じあへりけり。

この事のある者の語り出でたりしに、吉田中納言の、「乾き砂子の用意やはなかりける。」と
乾いた砂
なかったのだろうか

③ のたまひたりしかば、はづかしかりき。いみじとおもひける鋸の屑、賤しく、異様の事なり。
おつしやつた
すばらしい
下品で

庭の儀を奉行する人、乾き砂子を設くるは、故実なりとぞ。
準備する
昔からのならわし

〔徒然草〕による。

〔注〕 ※ 鎌倉 中書王にて……宗尊親王のお住まいで。

※ 鞆……蹴鞆。革製の鞆を蹴る貴族の遊戯。

問1 ① わづらひなかりけり とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。(3点)

問2 ② 人感じあへりけり。は「人々は感心しあった」という意味ですが、人々は佐々木隠岐入道のどのような行動に感心したのですか。次の空欄にあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。(3点)

をしたこと。

問3 ③ のたまひたり の主語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 佐々木隠岐入道 イ ある者 ウ 吉田中納言 エ 庭の儀を奉行する人

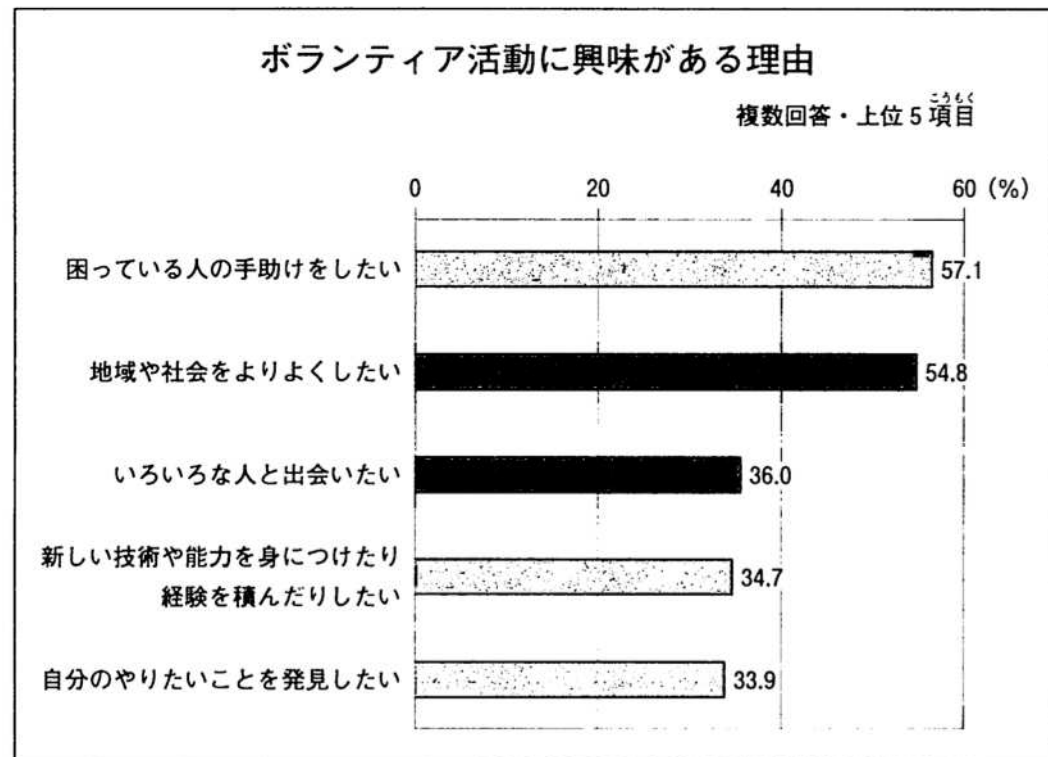
問4 本文の内容について述べた文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 雨が降る前から庭に砂を敷いておいて、ぬかるみを防ぐ必要があるということ。
イ 庭を整備する者たちが車で道具を運ぶことは、下品な行いに見えるということ。
ウ 砂を庭にまいてぬかるみを乾かすためには、砂が大量に必要であるということ。
エ 庭のぬかるみに対して乾いた砂を敷くやり方が、元々の慣習であるということ。

5

次の資料は、日本の満13歳から満29歳を対象にしたある調査で「ボランティア活動に興味がある」と答えた人による回答をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「ボランティア活動に期待すること」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの（注意）に従って、あなたの考えを書きなさい。（12点）



内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度)」より作成

（注意）

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

（以上で問題は終わります。）

